

大航海時代の外国語学習

——コロンブスの場合——

堀 田 英 夫

1. はじめに

15世紀から17世紀前半にかけて、ポルトガルとスペインを中心としてヨーロッパ人が、地球規模の遠洋航海により新航路を発見し、アフリカやアメリカ、アジア、オセアニアへと積極的な海外進出を行った。これは、今まで交流のなかった異なることばを話す者同士が接触し、交流することが一段と拡大したことを意味する。本稿では、共通に使える言語を持たない二者が出会ったとき、どのように意思疎通が図られたのか。また自分の母語とは異なる言語がどのように学ばれたのかを、できる限り当時の記録から見ていきたい¹⁾。本稿では、母語とは異なる言語を学習することを「外国語学習」と呼ぶことにする。

2. コロンブスの言語

2.1. コロンブスは何語で書いたか

コロンブスの第1次航海の日誌を要約したラス・カサス (Bartolomé de Las Casas, 1484-1566) は、『インディアス史』の中で、コロンブスの書いていることを引用した後に次のように書いている：

“Todas estas son palabras formales, aunque algunas dellas no de perfecto romance castellano, como no fuese su lengua materna del Almirante” (pp. 351-352) 「以上はすべて提督のことばそのままである。その或る箇所は正確なカスティーリャ語ではないが、それというのもカスティーリャ語は提督の母語ではないからである。」(長南訳、第1巻第48章 p. 486)

コロンブスは、1451年にイタリアのジェノバで生まれたという公証人の文

書が残っている。1476年、25歳の時にポルトガルのリスボンを本居地とするまで、一時的に航海に出たことがあったが、ジェノバで育ったから、母語としてジェノバ方言を話していたと考えられる（増田 1979: 13-19、モリスン 1992: 3-10）。したがってスペイン語（カスティーリャ語）²⁾は、コロンブスの母語ではなく、習い覚えた言語である。

コロンブスのスペイン入国（1485）の4年前、1481年と書かれたスペイン語書き込みが残っている：“desde el comienzo del mundo fasta esta era de 1481” [世界の初めからこの1481年の時代まで]³⁾。これは、スペインに来る前にスペイン語を書くことができたことを示している。

M. Pidal (1968) によると、コロンブスが書いたこの時のスペイン語は、語によっては、スペイン語形で書かれる場合が多いけれども、時にポルトガル語の特徴を含む語形が書かれていることがあるとしている。その特徴とは以下のようなものである。二重母音の欠如：“*naçimento*” ‘*nacimiento*’、母音音色の揺れ：“*coenta*” ‘*cuenta*’, “*mondo*” ‘*mundo*’, “*segondo*” o “*segundo*” ‘*segundo* o *según*’, “*ingendró*” ‘*engendró*’、ポルトガル語 *sair* の完全過去語尾のように *i* のみ：“*saliron*” ‘*salieron*’、ポルトガル語 *viver* の完全過去語尾 *-eu*: “*viueo*” ‘*vivio*’, *ser* の点過去形が、ガリシア・ポルトガル語 *ser* の完全過去形：“*foy*” o “*foe*” ‘*fue*’、副詞 *después* がガリシア・ポルトガル語形：“*despois*” (*después*) (p. 18)。

これらから M. Pidal (1968) は、当時のポルトガルでのスペイン語で書くという傾向⁴⁾に乗ってスペイン語で書くことを学んだとしている。大西洋横断の航海後も、自筆の文ほとんどはポルトガル語の特徴を持ったスペイン語で書いている：“*boy*” ‘*buey*’, “*coerpo*” ‘*cuerpo*’, “*se intenda*” ‘*se entienda*’, “*quero*” ‘*quiero*’, “*virdes*” ‘*viéredes*’ (p. 19)。またコロンブスは、イタリア人へもスペイン語で手紙（1502年、1504年、1562年。p. 23）を書き、イタリア語の本：*Historia de Plinio, tradocta per Christoforo Landino, Venecia, 1489*（大プリニウス『博物誌』）の欄外にも1495年頃、スペイン語で書き込みをしている（p. 23）。ただ、この本には最後の部分にスペイン語綴りの語を含むイタリア語書き込みも一部ある（pp. 23, 24）。Pierre d’Ailly 編 *Imago mundi*. Lovaina, 1480 o 1483（ピエール・ダイ『世界の姿』）には、当時のスペインの *ç* を使う書き方によるラテン語の書

き込みもある (pp. 44–46)。

ただし、Lapesa (1980: 285) によると、コロンブスの書いたスペイン語文に見られるポルトガル語の要素とされているもののうち、多くがジェノバ方言の要素であるという。“bem” ‘bien’⁵⁾, “pam” ‘pan’, “um” ‘un’, “bom” ‘buen’, “logo” ‘luego’, “moiro” ‘muero ← morir’, “noite”, ‘noche’, “povo”, ‘polvo’, “perigo”, ‘peligro’ など。これらは、15世紀あるいはそれ以前から使われていたジェノバ方言に由来する語形とのことである。

2.2. コロンブスは何語を読んだか

コロンブス自筆の書き込みのある蔵書は、上にあげた『世界誌』と『世界の姿』のラテン語の本、『博物誌』のイタリア語訳の本などであるから、ラテン語とイタリア語を読めたことはわかる。またスペイン語で書いたことからスペイン語も読めたはずである。カトリック両王とコロンブスの間でとりかわされた *Capitulaciones de Santa Fe* (サンタ・フェの協約)⁶⁾ は、スペイン語で書かれている。コロンブスの「インディアス事業」(La Empresa de las Indias) (青木 1989: 6) のための最も重要な契約書である。コロンブスがスペイン語で読んで理解できたゆえに、スペイン語の文書での取り決めがなされたのではないかと判断できる。

2.3. コロンブスは何語を話したか

増田 (1979: 29)、コリス (1992: 61)、宮崎 (2000: 17) に、コロンブスがラテン語を話したとある。いずれもポルトガル王室付歴史家ジョアン・デ・バロス (João de Barros, 1496?–1570) による『アジア史』(全4巻、1552–1615年) の記載が根拠である。

“Segundo todos affirmam, Christovão Colom era Genoez de nação, homem esperto, eloquente, e bom Latino, e mui glorioso em seus negocios.” (DECADA I. Liv. III. Cap. XI. p. 247) 「すべての人びとが断言するように、クリストヴァン・コロンはジェノヴァの人で、熟練をつんだ人物であり、りっぱなラテン語を朗々と話すが、たいへん自己宣伝家」(増田 1979: 29)

この“bom Latino”が「ラテン語を話す者」の「話す」ことに意味の重点があるかどうか疑問である。この次のページに“homem Latino”という表現がある。“E vendo elle que El Rey D. João oridnariamente mandava descubrir a costa de Africa com intenção de per ella ir ter a India, como era homem Latino, e curisoso em as cousas da Geografia, e lia per Marco Paulo, que fallaba moderadamente das cousas Orientaes do Reyno Cathayo, e assi da grande Ilha Cypango, veio a fanteziar que per este mar Oceano Occidental se podia navegar tanto, té que fossem dar nesta Ilha Cypango, em outras terras incognitas” (p. 248) [彼は、ジョアン王が普通は、アフリカの沿岸を通してインディアへ行く意図で、そこアフリカ沿岸を発見するよう、命じていると見て、彼は *homem Latino* だったので、また地理学の事柄に関心を持っていたので、また、カタヨ王国の東洋事情や、また大なるシパンゴ島についていくらか述べているマルコ・ポーロで読んで（知って）おり、この西の大洋から、このシパンゴ島や、他の未知の土地に突き当たるまで、航海できるだろうと空想するようになった]

この文脈からすると、“Latino”という語は、「ラテン語ができる」あるいは「ラテン語による教養を備えた」といった意味⁷⁾であって、話せることも含み得るが、必ずしも話すことを第一とした表現ではないと思われる⁸⁾。

また、ジョアン・デ・バロス (1496?-1570) は、コロンブスがポルトガル王と面会した時より後に生まれているので、その場面、すなわちインディアス事業売り込みの1483年末 (増田 1979: 28) あるいは1484年 (モリスン 1992: 30) と、第1次航海からの帰りの1493年 (Barros 1777-1788: Cap. XI) の2回の面会には立ち会っておらず、コロンブスが話す場面を直接見聞することはできなかったはずである。M. Pidal (1968: 14) は、コロンブスがジェノバで家業に従事していた時に、「商業ラテン語、すなわちスペイン人達がユーモアを込めてジェノバ・ラテン語」と呼んでいたラテン語を学ぶことができたとしている。しかし、当時のスペインのçを使う書き方によるラテン語表記 (M. Pidal 1968: 46) からスペイン人から学んだラテン語とも考えられる。Arranz (2006: 109) によると、上記の『世界誌』と『世界の姿』のラテン語の本にコロンブスが書き込んだラテン語は、強調したい部分の原文の語句の繰り返しを書いているの

が普通で、ラテン語を習得してはいず、スペイン語要素による多くの誤りがあるとのことだから、ラテン語を読んで理解することはできたが、十分に書くことはできなかったと考えられる。以上から、コロンブスが「りっばなラテン語」を話したということは疑わしいと言わざるを得ない。

1480年にポルトガル旧家の子孫の娘フェリパ・ベレストレロ・モニスと結婚し、1485年に妻が死去した後、スペインへ行くまでは、リスボンとポルトガル領のマデイラ諸島で暮らしつつポルトガルの商船で航海していた（モリスン 1992: 18, 31）。このポルトガルとの結びつきと、ポルトガル語の特徴を含んだスペイン語を書いたということから、ポルトガル語も話したと考えられる。また、スペイン語を書くことができ、スペインとの関係を考えれば、スペイン語も話したと考えられる。

2.4. コロンブスの外国語学習

コロンブスはラテン語、イタリア語、スペイン語を読むことができ、ジェノバ方言要素とポルトガル語の要素を含んだスペイン語で書いていて、ジェノバ方言、ポルトガル語、スペイン語、そしてひょっとしてラテン語も話していたらしいことがわかった。だが、コロンブスが、ラテン語やポルトガル語、スペイン語をどのように学習したかはわからない。

コロンブスが利用した書物の中に、ラテン語やスペイン語の文法書や入門書があるかどうかについての情報は見つけられなかった。ラテン語は、中世以来の文法書が当時も存在していたが、十分に習得していないとすると文法書による学習はしていなかったと考えられる。史上最初の近代語文法書であるネブリハの『カスティーリャ語文法』が出版されたのは1492年、最初の外国語としてのスペイン語文法書がルーヴァンで出版されたのが1555年なので、これらを利用してスペイン語を文法から学習することもできなかった。イタリア語、ポルトガル語、スペイン語は、いずれもラテン語を起源とするロマンス系言語であり、文法や語彙がお互い似ていたことがコロンブスに有利に働いたはずである。

コロンブスは、海の男であり、地中海を航海しつつ、聞き覚えた多くの言語

のカタコトをあやつり、後にポルトガルとアンダルシアの船乗りから習った航海上の表現をさらに身に付けて行ったのだらうと、Arranz (2006: 110) は述べている。

3. 西インド諸島住民とコロンブスらとのコミュニケーション

3.1. カトリック両王からインディアスの君主への親書

コロンブスは、西行き航海により、ジバング島へ行き、さらに進み大陸へ赴き、大カーン（大汗）にカトリック両王の親書を渡そうとしていた。航海日誌に次のように書いてある：

“luego me partiré á rodear esta isla fasta que yo haya lengua con este rey, y ver si puedo haber dél oro que oyo que trae, y después partir para otra isla grande mucho, creo que debe ser *Cipango*, según las señas que me dan estos indios que yo traigo, á la cual ellos llaman *Colba*, ... Más todavía, tengo determinado de ir á la tierra firme y a la ciudad de *Guisay*, y dar las cartas de Vuestras Altezas al *Gran Can* y pedir respuesta, y venir con ella.” (p. 43)⁹⁾ 「すぐにも出発して、島を廻り、この地の王と会って話をし、彼が持っているという黄金を手に入れることができるかどうかを見てみたいと考えております。インディオ達がコルバ（クーバ島のこと）と呼んでいるもっと大きな島へ向おうと思いますが、この島は、彼らの手真似から察するに、シバングに違いないと考えます。（中略）勿論、私はさらに進んで大陸へ赴き、キンサイの都へ行って、両陛下の御親書を大汗王に渡し、その返書を求め、これを持ち帰る決心を固めているのであります。」（林屋訳 p. 62）[10月21日]

カトリック両王は、コロンブスに、西へ向かう最初の航海に際し、インディアス（東洋）の君主へ宛てて、ヨーロッパの国際語であるラテン語で書かれた三通の「親書」を渡している。二通のあて名は空白で、どこかの王国にたどり着いた時に、そこの君主の名を書き込むようになっている、残りの一通のあて名は、「大カーン」（グラン・カン）となっている（モリソン 1992: 45）。大カーンとは、元朝の皇帝のことで、当時は既に明の時代になっているという情報がヨーロッパには伝わっていない。そのころのヨーロッパ人がインディアス

について『マルコ・ポーロの旅行記』（東方見聞録）に書かれたぐらいの情報しか持っていなかったことを示している（モリソン 1992: 24, 44-45）。

月村（2012: 278）によると、『マルコ・ポーロの旅行記』のいくつかの版のうち、「中世ヨーロッパでもっとも広く流布したのは」ボローニャのドミニコ会士ピピーノによってヴェネツィア方言版からラテン語訳された版で、75の写本が存在し、1485年に初めてアントウェルペンで印刷されたとのことである。コロンブスの蔵書にもこの版の1冊があり、書き込みをしていた。以下『マルコ・ポーロの旅行記』は、Juan Gil によるこの版¹⁰⁾の現代スペイン語訳（1987）から引用し拙訳を添える。

大カーンについて、『マルコ・ポーロの旅行記』に次のように書かれている：

“Al cabo de un año llegaron ante el gran rey de todos los tártaros, que se llamaba Cublay, que en su lengua se decía Gran Kan, que significa en la nuestra «gran rey de reyes»” (p. 17) [1年の後、彼ら（マルコ・ポーロ一行）は、フビライ（クブライ）という名の、すべてのモンゴル人（タタール人）の偉大な王——彼らの言葉で大カーンと言ひ、我らの言葉で「諸王の中の偉大な王」という意味である——のところに到着した] (p. 17)

3.2. コロンブスが連れて行った通訳

コロンブスの最初の航海には通訳と考えられる乗組員が一人いたことが航海日誌から読み取れる：

“Acordó el Almirante enviar dos hombres españoles: el uno se llamaba Rodrigo de Jerez, que vivía en Ayamonte, y el otro era un Luis de Torres, que había vivido con el Adelantado de Murcia, y había sido judío, y sabía diz que hebraico y caldeo y aun algo arábigo, y con estos envió dos indios” (p. 55) 「提督は二人のエスパニヤ人を派遣することにした。その一人はアヤモンテの住人であったロドリゴ・デ・ヘレスで、もう一人はムルシアの先遣都督（アデランタード）と一緒に暮らしたことがあり、かつてはユダヤ人であったルイス・デ・トーレスであった。トーレスはヘブライ語とカルデア語と、それにアラビア語も少し解したが、この二名と一緒にインディオを二人同行させた。」 (p. 77) [11月2日]

なぜ、ヘブライ語とカルデア語、それにアラビア語ができる通訳を連れて行ったのであろうか。当時、地中海やアフリカの沿岸地帯で異教徒といえば、土着の宗教の他は、ユダヤ教徒とイスラム教徒であり、彼らとコミュニケーションをとるためには、これらの言語が想定される。これとは別に、以下に見るように、『マルコ・ポーロの旅行記』の情報も、ヘブライ語、アラビア語がインディアスで役に立つという考えの基になっていると考えられる。

Gil (1987: viii) によると、コロンブスの第1次航海の日誌にある東洋の地名の位置記述がマルコ・ポーロの書いていることと合わないこと、またコロンブスが『マルコ・ポーロの旅行記』を入手したのが1497年（第2次航海から帰国した1496年の後、第3次航海出発の1498年の前）という記録があり、西へ向かってインディアスへ行くという事業の計画立案や第1次の西行き航海の準備には、この書からの直接的な情報収集はできていなかったと考えられる。しかし、上で見たように、ラス・カサス要約によるコロンブス第1次航海の日誌には『マルコ・ポーロの旅行記』に出てくる東洋の地名や情報が出てくる。当時のヨーロッパで、コロンブスのまわりの人びとには、『マルコ・ポーロの旅行記』の内容の知識が、ある程度共有されていたと判断できる。

『マルコ・ポーロの旅行記』には、大カーン・フビライ・ハンの軍隊に、“los sarracenos y judíos” [サラセン人（イスラム教徒）とユダヤ人] の部隊もあったという記載がある。

“Capítulo sexto. De cómo el rey Cublay impuso silencio a los sarracenos y judíos que se atrevieron a insultar la señal de la Cruz de salvación. Los judíos y los sarracenos que habían formado parte del ejército de Cublay comenzaron a insultar a los cristianos que habían venido con Nayam” (p. 72) [第6章 救いの十字の印を侮辱しようとしたサラセン人とユダヤ人をフビライがいかに黙らせたかについて。フビライの軍隊の一部を構成していたサラセン人とユダヤ人がナヤムと来ていたキリスト教徒たちを侮辱し始めた]¹¹⁾

また、大カーンの誕生日を祝う諸民族に、“cristianos, judíos, sarracenos y los demás paganos” [キリスト教徒、ユダヤ人、サラセン人やその他の異教徒たち] という記述もある。

“Capítulo décimo cuarto. De la gran fiesta de cumpleaños del rey y sobre la magnificencia de vestimentos de los caballeros de su corte ... Es preciso también que todos los pueblos, sea cual fuere su religión, cristianos, judíos, sarracenos y los demás paganos invoquen a sus dioses con solemnes plegarias por la vida, la salud y la prosperidad del Gran Kan.” (pp. 80–81) [第14章 王の盛大な誕生祝とその宮廷の騎士たちの衣装の素晴らしさについて。(略) すべての民族が、宗教がどうであれ、キリスト教徒、ユダヤ人、サラセン人やその他の異教徒たちが大カーンの長寿、健康と繁栄を願って、厳かにそれぞれの神にお祈りをすることがまた必要である。]

キリスト教徒、ユダヤ教徒、イスラム教徒がいるのなら、ラテン語、ヘブライ語、アラビア語によるコミュニケーションが可能という判断ができる。コロンブスは、これらのいずれかの言語を使ってインディアスの王である大カーンとコミュニケーションをしようとしたと考えられる。また以下で見るように、大カーンが支配する領土とジパング島との地理的關係と戦いの記載があることから、ジパングの王とも同じようにラテン語、ヘブライ語、アラビア語のいずれかを介することで、コミュニケーションが可能と考えていたのでないかと考えられる。

まず、ジパング島の位置は、大カーンが征服した Mangi (マンジ、南宋) からの距離で記載されている：

“la isla de Ciampagu, que es una isla al oriente en alta mar, que dista de la costa de Mangi mil cuatrocientas millas.” (p. 132) [ジパング島は、東方沖合にある島で、マンジの海岸から千四百マイル離れている。]

また、大カーンのフビライは、ジパング島を征服するために軍隊を送っている¹²⁾：

“El Gran Kan Cublay, prestando oídos a los mercaderes que le narraban las riquezas de Ciampagu, envió allí a dos de sus barones con un imponente ejército para someter la isla a su dominio.” (p. 133) [大カーン・フビライは、ジパングの富を語る商人達に耳を貸し、その島を支配下に置くために、有力な家臣の内2人を強大な軍隊と共に送った。]

3.3. 贈り物、物々交換と手真似、身振り

共通の言語を持たない西インド諸島住民とコロンブス一行とのコミュニケーションを、ラス・カサスが要約したコロンブスの第1次航海の日誌を中心にしてみる¹³⁾。

3.3.1. 贈り物、物々交換

コロンブス側が何らかの物を贈ると、西インド諸島住民側も贈り物を持ってくるといふ交換が行われている。これらはお互いが友好関係を望んでいることの意味表示である：

“les di á algunos de ellos unos bonetes colorados y unas cuentas de vidrios, que se ponian al pescuezo, y otras cosas muchas de poco valor, con que hobieron mucho placer y quedaron tanto nuestros que era maravilla. Los cuales después venian á las barcas de los navios adonde nos estábamos, nadando, y nos traian papagayos y hilo de algodón en ovillos, y azagayas, y otras cosas muchas, y nos las trocaban por otras cosas que nos les dábamos, como cuentecillas de vidrio y cascabeles.” (p. 25) 「幾人かに、赤いボンネット帽と、首飾になる硝子玉や、その他たいして値打のないものをいくつか与えました。すると彼らは非常に喜び、全くすばらしいほど我々になつてしまったのであります。しばらくして彼らは、我々が居た端艇(バルカ)まで泳いできて、おうむ(パパガヨ)や、綿糸の糸玉や、投げ槍や、その他色々なものをたくさん持参し、我らが与える硝子玉の数珠や鈴などと交換しました。」(林屋訳：p. 37) [上陸初日]

3.3.2. 手真似、身振り

“yo vide algunos que tenían señales de heridas en sus cuerpos, y les hice señas que era aquello, y ellos me amostraron cómo allí venían gente de otras islas que estaban acerca y les querían tomar, y se defendían” (p. 26) 「身体に傷跡のある者を幾人か見ましたので、それはどうしたのかと手真似できいてみましたところ、彼らは、近くの島の者がやってきて捕らえようとしたため、身を守ったのだという様子を示しました。」(p. 38) [上陸初日]

“después partir para otra isla grande mucho, que creo que debe ser *Cipango*, según las señas que me dan estos indios que yo traigo, á la cual ellos llaman *Colba* (...), en la

cual dicen que ha naos y mareantes muchos y muy grandes” (p. 43) 「私の連れてきているインディオ達がコルバ（クーバ島のこと）と呼んでいるもっと大きな島へ向おうと思いますが、この島は、彼らの手真似から察するに、シパングに違いな一と考えます。彼らの話では、この島には船もあれば、非常に立派な船乗りも大勢居るといことであります。」 (p. 62) [10月21日]

この引用からもわかるように、手真似からは、正確な情報は得られず、コロンブスは、自分が望んだ情報を得たと誤解してしまっている。

3.4. 武力による威嚇または武力の行使

ことばが通じない相手に対して、武力による威嚇または武力の行使によって自分たちの意思を伝える方法もとられたことが記載されている。コロンブス一行のその意思とは、現地の人びとを、使用人にし、捕虜にし、服従させること、また場合によっては奴隷にして商品とすることもコロンブスは考えていた¹⁴⁾：

“Ellos deben ser buenos servidores” (p. 26) 「彼らは利巧なよい使用人となるに違いありません」 (pp. 38-39) [上陸初日]

“salvo que vuestras Altezas, cuando mandaren, puédenlos todos llevar a Castilla, ó tenellos en la misma isla captivos, porque con 50 hombres los terná todos sojuzgados y les hará hacer todo lo que quisiere” (p. 29) 「両陛下の御命令さえあれば、私は彼らの全員を捕えてカスティリヤにお送りすることもできれば、またこの島に全員をそのまま捕虜にしておくこともできるのであります。それは、五十名の部下で彼らをすべて服従させることができるからでありまして、彼らに何でもお望みのことをさせることができますのであります。」 (p. 43) [10月14日]

“y cobrando grandes señoríos y riqueza y todos sus pueblos de la España” (p. 63) 「広大な領土と、富と、これらすべての民を、エスパニヤのものにしてしまうことができるものと考えます。」 (p. 87) [11月12日]

“y así, son buenos para les mandar y les hacer trabajar, sembrar, y hacer todo lo otro que fuere menester” (p. 106) 「彼らには、命令を与えて、働かせ、種を播かしたり、その他必要なあらゆることをさせれば、まことに都合が良い者共なのであ

ります。」(p. 145) [12月16日]

3.4.1. 武器の威力を示す

“el Almirante envió por un arco turquesco y un manojo de flechas, y el Almirante hizo tirar á un hombre de su compañía, que sabía dello; y el Señor, como no sepa qué sean armas, porque no las tienen ni las usan, le pareció gran cosa”, “Mandó el Almirante tirar una lombarda y una espingarda, y viendo el efecto que su fuerza hacian y lo que penetraban, quedó maravillado. Y cuando su gente oyó los tiros cayeron todos en tierra.” (p. 129) 「提督は、トルコ弓と、矢を一束持ってこさせ、弓の上手な部下の一人にこれを使わせた。彼らはこういう武器を持っていないし、また使ってもいなかったから、首長にはこれが武器であるということが判らず、これは大変なものだと驚いた」「そして擲弾砲（ロンバルダ）とエスピナルダ銃を打たしたが、その弾丸が非常な力で貫いて行くのを見て、彼 [インディオの首長] は感心してしまった。彼らは、砲弾の音をきいた途端に大地にひれ伏してしまったのである。」(p. 176) [12月26日]

3.4.2. 武力による威嚇

武力の差を見せつけることによって、自分たちに敵対しないようにという警告を発している。カリブ人が攻めてきても守ってやるから安心するようにと武力を示したとの理屈も示されているが、この理屈が相手に通じているかどうかはまったく不明である。

“y mostróle la fuerza que tenían y efecto que hacían las lombardas, por lo cual mandó armar una y tirar al costado de la nao que estaba en tierra, porque vino á propósito de platicar sobre los caribes, con quien tienen guerra, y vio hasta dónde llegó la lombarda, y cómo pasó el costado de la nao y fué muy lejos la piedra por la mar. Hizo hacer también una escaramuza con la gente de los navíos armada, diciendo al cacique que no hubiese miedo á los caribes aunque viniesen. Todo esto diz que hizo el Almirante porque tuviese por amigos á los cristianos que dejaba y por ponerle miedo que los temiese.” (p. 136) 「そして擲弾砲の威力と、その効果のほどを王に見せつけたのだが、まず擲弾砲に弾丸をこめさせて、岸にあげてあった本船（ナオ）の船側めがけ、一発打ち放させた。それはちょうど、彼らが戦っているカ

リベ族の話になったからだったのだが、王は、石弾が船の横腹をつきぬけて、はるか彼方の海へ落ちるのを目のあたりにしたのである。提督はさらに、武装した船員達に戦の真似事をやらして見せた上で、酋長に、たとえカリベ族が攻めてきても決して恐れないようにとのべた。提督がこんなことをしてみせたのは、この地に残留させるキリスト教徒達を、彼が友人として扱いかつ畏れるようにと考えてのことであった、とのべている。」(p. 186) [1493年1月2日]

3.4.3. 武力の行使

実際に武力を行使した相手は、カリブ人でないとわかっているが、その同じ習慣を持っているに違いないという書き方で、武力行使を正当化している。

“Viéndolos venir corriendo á ellos, estando los cristianos apercebidos, porque siempre los avisaba de esto el Almirante, arremetieron los cristianos á ellos, y dieron á un indio una gran cuchillada en las nalgas, y á otro por los pechos hirieron con una saetada, lo cual visto, que podian ganar poco aunque no eran los cristianos sino siete y ellos cincuenta y tantos, dieron á huir que no quedó ninguno, dejando uno aquí las flechas y otro allí los arcos.” “Y que si nos son de los caribes, al menos deben ser fronteros y de las mismas costumbres” (p. 153) 「キリスト教徒達は常に提督から注意されていたから、彼らが走り寄ってくるのをみて、ただちにそれと気がつき、彼らに立ち向かい、一人のインディオの尻を切りつけ、もう一人の胸を矢で射った。キリスト教徒達は、僅か七名であったのに、彼らは五十数名も居たのだが、勝てないと見るや、一人残らず、ある者は矢をそこに、ある者は弓をあちらに棄てて逃げて行ってしまった。」(p. 206) 「彼らは、カリベ族でないにしても少なくともその隣人で、カリベ族と同じ習慣を持っているに違なく」(p. 207) [1月13日]

コロンブスは、現地のインディオから手真似で、人間を食べる種族の情報を得ている：

“Entendió tambien que lejos de allí había hombres de un ojo, y otros con hocicos de perros, que comian los hombres, y que en tomando uno lo degollaban y le bebian su sangre y le cortaban su natura.” (p. 57) 「ここからは遠いが、一つ目の人間や、犬のような鼻面をしていて、人を喰う人間がおり、人をつかまえるとすぐに首

を切り、血を吸い、生殖器を切り落とすといっているように解せた。」(pp. 79-80) [11月4日]

一つ目の人間や、犬のような鼻面をした人間が存在するとは信じられないため、食人の情報も疑わしい。しかしこれがカリブ人（もしくはその隣人）への武力行使の根拠となっている。『マルコ・ポーロの旅行記』にも、上都 (Ciandu) の地の人びとが刑死した人間を食べるという記述 (p. 64) の他に、ジバング島住民が捕まえた外国人で身代金を払えない者を食べるという記述がある：

“Cuando los habitantes de la isla de Ciampagu apresan a un extranjero, si el cautivo puede lograr su redención por dineros, lo dejan ir a cambio de un rescate; mas si carece de bienes para alcanzar su libertad, lo matan y se lo comen cocido e invitan a semejante banquete a sus parientes y amigos, ya que comen con gran gula aquella carne, afirmando que la carne humana es mejor que ninguna otra.” (p. 135) [ジバング島の住民が外国人を捕えたとき、もしその捕えられた者がお金で身請けできるのならば、身代金の代わりに解放される。しかし解放されるための財産が足らなければ、殺されて煮て食べてしまう。そのような宴会には親戚や友人を招待し、人肉はどんな他の肉よりもうまいと言いながら、貪欲にその肉を食べる。]

コロンブスの航海日誌に言及されているジバングやキンサイの都の情報と同じく、食人の習慣の情報も、『マルコ・ポーロの旅行記』に書かれていることに基づいていると考えられ、事実かどうかは疑わしい。

3.5. 双方が相手のことばを部分的なりとも覚えようとしていた

西インド諸島住民も、コロンブス一行もまた、相手のことばを覚え、コミュニケーションを図ろうとした様子がうかがえる。

3.5.1. 西インド諸島住民

“veo que muy presto dicen todo lo que les decía” (p. 26) 「私が彼らにしゃべることを、彼らは皆すぐに口にいたします。」(p. 39) [上陸初日]

西インド諸島住民は、コロンブス一行と初めて接触した10月12日に、初めて「鈴」を目にし、手にした (p. 25, 和訳 p. 37)。その鈴のことを、12月26日には、“chuq chuq”と呼んで黄金と交換したことが記述されている。こ

れは現地住民とコロンブス一行とのやりとりの中で生まれた語で「サビール」¹⁵⁾の一部と考えられる。

“Que aun no llega la canoa abordo cuando llamaban y mostraban los pedazos de oro, diciendo chuq chuq por cascabeles, que están en puntos de se tornar locos por ellos.” (p. 128) 「彼らは、カノアがまだ本船につかない間から声をあげ、黄金の薄片を手にかかげて、鈴を意味するチュク、チュケ [ママ] という言葉を叫び、鈴のためには気も狂いそうな様子であった。」 (p. 174) [12月26日]

3.5.2. 航海日誌に書きとめた西インド諸島住民のことば

“almadias, que son navetas de un madero, adonde no llevan vela. Estas son las canoas.” (p. 47) 「アルマディアというのは一本の木から作った小舟で、帆をたてていない。これがカノアである。」 (p. 67) [10月26日]

“Vinieron en aquel dia muchas almadias ó canoas á los navíos á resgatar cosas de algodón filado y redes en que dormían, que son hamacas.” (p. 56) 「この日多数の丸木舟、すなわちカノアが、綿糸で作ったものは、彼らが寝具として使用している網、すなわちアマカを取引するために、船へやってきた。」 (p. 79) [11月3日]

これら canoa (カヌー) と hamaca (ハンモック) は、スペイン語の中に取り入れられた。また cacique (首長、ボス) という語は、12月17日の記載では、ある人物の名前 (固有名詞) として理解していた：

“Vieron á uno, tuvo el Almirante por gobernador de aquella provincia, que llamaban Cacique” (p. 107) 「カシケと呼ばれている男に出会ったが、提督は、彼がこの地方の知事 (ゴベルナドール) に違いないと思った」 (p. 146)

翌12月18日の記述では、それを首長やボスの意味で理解していったことが読み取れる：

“allí supo el Almirante que al Rey llamaban en su lengua Cacique” (p. 110) 「この時に提督は、彼らが王のことをカシケと呼んでいることを知ったのである」 (p. 151)

だが、コミュニケーションはなかなかうまくいかなかったことも記述されている。

“salieron tres cristianos, diciendo que no hobiesen miedo, en su lengua, porque sabian algo de ella por la conversacion de los que traen consigo.” (p. 80) 「キリスト教徒三名が、同伴している者達との会話によって彼らの言葉を若干知っていたので、恐がることはない、とその言語で叫びながら上陸して行った。しかし、彼らは皆逃げて行ってしまい」(pp. 109-110) (11月27日)

“Cada dia entendemos mas á estos indios y ellos á nosotros, puesto que muchas veces hayan entendido uno por otro” (pp. 97-98) 「我々はインディオ達のいうことがだんだんと判り、彼らも又我々のいうことを理解するようになってきました。もっとも彼らは意味の取り違えをしばしばしておりますが。」(p. 133) (12月11日)

コロンブスは、他にいくつかの地名 (Colba: p. 43, Bosio: p. 43, Babeque: pp. 62, 92, 98 など)、食べ物となる植物 (niames: p. 100, ajes: p. 105)、探し求めていた価値ある物 (黄金: nucay: p. 53, tuob, caona, nozay: p. 151, 植物: liñaloe pp. 42, 45, 63, 138)、権力者の名 (Nitayno: p. 122, Guacanagari: p. 133)、民族の名 (canibales: pp. 106, 107) など (とコロンブスが理解した) 現地住民ことばの語形を書きとめている。地名については、現地の呼び名を書きとめつつも、スペイン語名で独自に命名している:

“la isla grande, la cual anembraron estos hombres de *San Salvador* que yo traigo la isla *Saometo*, a la cual puse nombre de *Isabela*.” (p. 39) 「サン・サルバドル島から連れてきた者達は、この大きな島を、サオメト島と呼んでいましたが、私はこれをイサベラ島と名づけました。」(p. 56) [10月19日]

この引用にある「サン・サルバドル島」もコロンブスの命名であり、現地で“Guanahani” (p. 24) 「グワナハニ」(p. 36) と呼んでいた、コロンブス達が最初に上陸した島である。

3.6. 通訳とするため現地住民を拉致

当時、遠征でのコミュニケーション対策として、現地住民を拉致し連れてきて、自分たちのことばを覚えさせ、次の遠征に通訳として連れて行くことがよく行われていたようである。

“porque ya otras muchas veces se acacé traer los hombres de Guinea para que aprendiesen la lengua en Portugal, y despues que volvian y pensaban de se aprovechar dellos en su tierra por la buena compañía que le habían hecho y dádivas que se les habían dado, en llegando en tierra jamas parecían.” (p. 64) 「これはギネアの男達を連れてきたときに、すでにたびたび経験していることであります。すなわち、彼らをポルトガルへ連れてきて言葉を覚えさせ、その上彼らをよく待遇し、贈物を与えたりすることによって、(中略) 彼らを彼地で利用しようと考えたのですが、彼らは一度自分の土地に帰るや、もう再び現れては来なかったのであります。」(pp. 89-90) [11月12日]

コロンブスが通訳にするためスペインへ連れ帰った西インド諸島住民のうち、2人が第2次航海の時に、コロンブス一行と現地住民との間の通訳として働いたことが「チャンカ博士がセビリヤ市へ送った書簡」に書かれている。2人は、どのように習得したのかは不明だが、スペイン人の間で生きていくために、スペイン語を習得したのだと考えられる。

“Esto todo pasaba estando por intérpretes dos indios de los que el otro viage habian ido á Castilla, los cuales habian quedado vivos de siete que metimos en el puerto, que los cinco se murieron en el camino, los cuales escaparon á uña de caballo.” (Navarrete 1922: p. 235) 「こうしたことはすべて、最初の航海の際、カスティリヤへ連れ帰った二人のインディオを通訳として [グアカマリーというインディオの王と] 話し合ったのですが、この二人は、あの港で連れこんだ七人のうちの生き残り、五名は途中で死んでしまい、二人が辛うじて生き残っていたのであります。」(林屋訳 2011: pp. 100-101)

4. まとめ

コロンブスが、ラテン語やポルトガル語、スペイン語をどのように学習したかはわからない。地中海やアフリカ沿岸を航海しながら、ポルトガル人やスペイン人の仲間からポルトガル語やスペイン語を聞き覚えたと考えられる。また、方法は不明だが、ラテン語、イタリア語などを読むことと、スペイン語で書くことも習い覚えた。

西インド諸島の住民とは、相互が、贈り物や物々交換で、友好関係を築こうとし、身振り手振りで意思疎通を図った。一方、コロンブス側は、武力によって、自分たちが上位であることを示した。食べ物、探し求めている価値あるものの名、権力者の名など、いくつかの語は住民のことばを聞き覚え使ったようである。また、コロンブスらがポルトガル人とアフリカ沿岸を探検した時にしたように現地住民を連れ帰り、通訳として役立てようとすることも、西インド諸島で同じように考え、実行している。第1次航海に連れ去られ、第2次航海に西インド諸島に連れてこられた2人は、ある程度のスペイン語を習得したようである。

謝辞

本稿は、学長特別教員研究費「大航海時代の戦国愛知—16世紀前後の日欧史料から—」（研究代表者：上川通夫）による研究の一部である。いくつかの刺激と知見をいただいた同研究会メンバーに感謝します。

注

- 1) 以下の引用に添えた「」に入れたのは和訳の引用である。[]には拙訳を入れた。また引用文中の[]の中は、筆者が書きくわえたものである。引用中の下線は筆者による。
- 2) カスティーリャ・アラゴンの連合を経てカスティーリャ語が、この時代に近代スペインの標準語となっていった。引用の場合を除き、「スペイン語」の名称を使う。
- 3) Aeneas Sylvius Piccolomineus. *Historia rerum ubique gestarum*. Venecia, 1477 (『世界誌』)への書き込み。M. Pidal (1968: 18)。
- 4) ポルトガルの劇作家ジル・ヴィセンテ (Gil Vicente 1465?-1536?) は「高度に洗練された宮廷風の作品をカスティーリャ語で書く一方、民衆的性格のものにはポルトガル語を使っている」(ラペサ 2004: 293, Lapesa 1980: 285)、ポルトガルの国民詩人カモンイス (Luis Vaz de Camões 1524-1580) にも「作品の中にはスペイン語で書かれたもの」(増田 1979: 11-12)がある、というポルトガルでの言語状況がある。
- 5) 各語に相当するスペイン語形を引用符‘ ’で、ラペサ (2004: 293) から引用する。
- 6) <http://pares.mcu.es/ParesBusquedas/servlets/ImageServlet>
- 7) 200年ぐらい後の1789年の辞書であるが、Antonio Moraes de Silva. *Diccionario da lingua portugueza* (1813: s.v. latino) で“adj. Pertenciente ao Romano” [形容詞. ローマ

人に関する]に続いて、“subst. Que sabe Latim.” [名詞, ラテン語を知っている] という説明がある。

また50年ぐらい後で別の言語のスペイン語ではあるが、*El ingenioso hidalgo Don Quijote de La Mancha* (ドン・キホーテ正編) (1605) の第22章で、徒刑囚の一人を描写する場面：“Este yva en abito de estudiante, y dixo vna de las guardas, que era muy grande hablador y muy gentil Latino” (fol.103v) 「この男は学生のなりをしていた。そうして、すばらしい弁舌家であり、達者なラテン語学者だと、看守の一人が言った」(永田訳 p. 120)。同じセルバンテスの *Novelas Ejemplares* (模範小説集) の中の “Novela y coloquio que passó entre Cipion y Bergança” (犬の対話) で：“Ay algunos Romancistas, que en las conuersaciones disparan de quando en quando con algun Latin breue, y compendioso, dando a entender a los que no lo entienden, que son grandes Latinos, y apenas saben declinar vn nombre, ni conugar vn verbo.” (fol. 250v) 「どうかすると会話の中に、簡単な手ごころなラテン語をちょいちょい挿入して、こうやって全然ラテン語を知らない連中に大したラテン語の大家の如く思いこませ、その実名詞の活用も動詞の変化もろくすっぽ御存じないイスパニヤ人もいるんだからね。」(会田訳 p. 168。現代表記にした)。“Cip. Pues otra cosa puedes aduertir, y es, que ay algunos, que no les escusa el ser Latinos de ser asnos.” (fol. 250v) 「もう一つ留意していいことがある。それはだね、いくらラテン語は知っていても、馬鹿だということには些かも変りのない連中もいるってことだ。」(p. 168)

- 8) 他に Prologo (序文) の “os Latinos chamam *affatus*” [Latino たちが *affatus* と呼んでいる] で、[ラテン語話者、(古代) ローマ人] といった意味でも使っている。
- 9) コロンブスの第1次航海の日誌は、Navarrete (1922) から引用する。
- 10) “traducido del vulgar al latin por fray Francisco de Pupuris de Bolonia” (p. 11) [ボローニャの Francisco de Pepuris 師により俗語からラテン語に訳された] とあり、1485年、アントウェルペン印刷 (p. lxvii)
- 11) 中世フランス語版 (月村・久保田訳 2012) は、ユダヤ人の記載なく、偶像崇拜者、サラセン人、キリスト教徒 (p. 99。大カーンの軍隊でなく、打ち負かされたキリスト教徒の王の支配地住民)。誕生日の箇所は、あらゆる部族の人びと (p. 112) と書かれている。
- 12) 史実と空想の話を含めて文永の役と弘安の役の元寇を記述している。また『マルコ・ポーロの旅行記』には、ジパングの都を占拠したフビライの兵が、ジパング軍に降参し、帰国したとする版と、ジパングに居住することとしたとする版がある。本稿で利用した版は、帰国した (現代スペイン語訳 p. 135) とあり、中世フランス語版は、一生残留した (和訳 p. 200) とある。

- 13) Martinell (1988) は、発見と征服の広範囲な記録を基に、コミュニケーションの手段を、身振りと手振り、贈り物と物々交換、通訳にまとめている。本稿では、これらに加えて、双方による相手のことばを一部なりとも聞き覚えること、それにコロンブス側が自分たちの優位性を武器や武力で示したことを史料から見る事ができた。
- 14) 第1次航海から帰国途上1493年2月15日付「計理官ルイス・デ・サンタンヘルへの書簡」に“esclavos”（奴隷）の語が記載されている。Navarrete (1922: 194)、林屋訳 (2011: 57)
- 15) 「サビール」とは、「個人（言）語 (idiolect) 的レベルで、2つ以上の言語からの語彙的・統語的借用で生じる偶発的な形式によるものであり、多言語併用地域において特定の目的と場面（たとえば、商業上の取り引きなど）に応じて、その場限りで用いられる言語」（『言語学大辞典』第6巻術語編、三省堂、1996：「サビール」の項）のことである。

引用文献

注に記載した一部は省略してある。

ウェブサイトは2013年5月から7月にかけて参照した。

- Arranz Márquez, Luis. *Cristóbal Colón: Misterio y Grandeza*. Madrid, Marcial Pons, 2006.
- Barros, João de. *Da Ásia de João de Barros e de Diogo do Couto : dos feitos que os portugueses fizeram no descobrimento dos mares e terras do Oriente*. Nova ed. Lisboa : Na Régia Officina Typografica, 1777-1788. <http://purl.pt/7030>
- Cervantes Saavedra, Miguel de. *El ingenioso hidalgo don Quijote de la Mancha*. Ed. facsimil. Reproducción digital de la 1ª ed. de Madrid, por Iuan de la Cuesta, 1605. Localización: Biblioteca Nacional (España). Sig. Cerv./ 118. <http://bib.cervantesvirtual.com/FichaObra.html?Ref=4944&portal=40>
- Cervantes Saavedra, Miguel de. *Novelas ejemplares*. Ed. facsimil. Reproducción digital a partir de la 1ª ed. de Nouelas exemplares, En Madrid, por Iuan de la Cuesta, 1613, f. 240v - 274r — Localización: Biblioteca Nacional (España). Sig. Cerv./ 2538. <http://bib.cervantesvirtual.com/FichaObra.html?Ref=4992&portal=40>
- Gil, Juan. “Libros, descubridores y sabios en la Sevilla del quinientos”. en *El libro de Marco Polo anotado por Cristóbal Colón, El libro de Marco Polo de Rodrigo de Santaella*. Edición, introducción y notas de Juan Gil, Madrid, Alianza Editorial, 1987, i-lxix.
- Lapesa, Rafael. *Historia de la lengua española*, 8ª ed. Editorial Gredos, 1980.
- Las Casas, Bartolomé de. *Historia de las Indias*. Tomo 1, (ahora por primera vez dada a la luz por el Marqués de la Fuensanta del Valle y D. José Sancho Rayón) Ed. facsimil. Reproducción

- digital de la ed. de Madrid, Imp. de Miguel Ginesta, 1875. <http://bib.cervantesvirtual.com/FichaObra.html?Ref=26664&portal=244>
- Martinell Gifre, Emma. *Aspectos lingüísticos del descubrimiento y de la conquista*. C.S.I.C., Madrid, 1988.
- Menéndez Pidal, Ramón. *La lengua de Cristóbal Colón*. Madrid, Espasa Calpe. 5ª ed., 1968 (1a. 1942).
- Navarrete, M. Fernández de. *Viajes de Cristóbal Colón con una carta*. Madrid, Calpe, 1922.
Digitizing sponsor: University of Toronto. <http://archive.org/details/viajesdecristb00nava>
- Polo, Marco. *El libro de Marco Polo anotado por Cristóbal Colón, El libro de Marco Polo de Rodrigo de Santaella*. Edición, introducción y notas de Juan Gil, Madrid, Alianza Editorial. 1987.
- Silva, Antonio Moraes. *Diccionario da lingua portugueza – recopilado dos vocabularios impressos ate agora, e nesta segunda edição novamente emendado e muito acrescentado*. Typographia Lacerdina, Lisboa. 1813 (1789). <http://www.brasiliana.usp.br/pt-br/dicionario/edicao/2>
- コリス, ジョン・スチュワート. 『人間コロンブス』. 高岬沙世訳, 時事通信社, 1992.
『コロンブス航海誌』. 林屋永吉訳, 岩波書店, 1977.
『コロンブス全航海の報告』. 林屋永吉訳, 岩波書店, 2011.
- セルバンテス. 「犬の対話」, 『セルバンテス短編選集上』. 会田由訳, 白水社, 1947.
pp. 131-256.
- セルバンテス. 『ドン・キホーテ』正編(二). 永田寛定訳, 岩波書店, 1973 (1949).
- 月村辰雄. 「マルコ・ポーロを原典で読む—中世フランス語版『東方見聞録—』訳者あ
とがき」, 『マルコ・ポーロ東方見聞録』. 岩波書店, 2012. pp. 269-291.
- 林屋永吉. 「第2次航海について」, 『コロンブス全航海の報告』. 岩波書店, 2011.
pp. 62-65.
- 増田善郎. 『コロンブス』. 岩波書店, (岩波新書93), 1979.
『マルコ・ポーロ東方見聞録: 全訳』. 青木一夫訳, 校倉書房, 1960 (校倉選書).
『マルコ・ポーロ東方見聞録』. 月村辰雄, 久保田勝一訳, 岩波書店, 2012.
- 宮崎正勝. 『ジバング伝説』. 中公新書, 中央公論新社, 2000.
- モリスン, サミュエル. 『大航海者 コロンブス』. 荒このみ訳, 原書房, 1992.
- ラス・カサス. 『インディアス史1』. 長南実訳, 大航海時代叢書 (第II期) 21, 岩波書
店, 1981.
- ラペサ, ラファエル. 『スペイン語の歴史』. 山田善郎監修, 中岡省治・三好準之助訳,
昭和堂, 2004.

Aprendizaje de lenguas extranjeras en la Era de los Descubrimientos —en el caso de Colón—

HOTTA Hideo

Resumen

En la Era de los Descubrimientos los europeos, principalmente portugueses y españoles, expandieron sus actividades a África, América, Asia y Oceanía. En esta expansión aumentaron las situaciones comunicativas entre las personas que no compartían un idioma común.

Cristóbal Colón leía latín, italiano y probablemente castellano, aunque se desconoce cómo aprendió latín y castellano. Y escribía casi siempre en castellano con lusismos o elementos genoveses.

Obsequios y rescates, gestos y señas fueron medios de comunicación en el primer contacto entre Colón y los habitantes de las Antillas. Las dos partes aprendieron a decir algunas palabras para comunicarse. Pero Colón igualmente utilizó la amenaza y la fuerza para someter a los antillanos y llevó a algunos a España para utilizarlos como intérpretes. Sobrevivieron únicamente dos de ellos, que sirvieron de intérpretes en su segundo viaje.